

郭沫若と『社会組織と社会革命に関する若干の考察』  
(河上肇著) についてのノート (下)  
— 「革命文学」論争覚え書 (7)

中 井 政 喜

目次

- I はじめに
- II 『社会組織と社会革命』についての郭沫若の言及
- III 影響関係の明瞭な点について (以上、前々号)
- IV 影響を受けつつ反論した点について (前号)
- V 文芸理論の基礎として受容した可能性のある点について (今号)

V 文芸理論の基礎として受容した可能性のある点について

この章では、郭沫若が文芸理論の分野において、河上肇の所論から影響を受けた可能性のある点（郭沫若の文章の中で明確に表現されていないが、受容の可能性を推測できる点）について、取りあげることにする。

郭沫若が「革命文学」を提唱するに至る理論的過程について、以前私なりの考え方を述べたことがある。<sup>(16)(3)</sup>今それに拠って、1924年半ば頃から26年にかけての経過に示される内容について概略触れる。

郭沫若は、①1924年半ば頃からマルクス主義に対して確信を持ち、社会革命を促進する、生活の反映としての文芸、宣伝の利器としての文芸を支持することを表明した（「孤鴻」、1924・8・9、『創造月刊』第1巻2期、1926・4）。これは社会革命を支持する者の立場からの意思表示とも言える。

②また、「文学的本質」（1925・7・8、『学芸』第7巻1号、1925・8・15）では、溯った文学の発生源（本質）の視点に立って、ロマンチズムとリアリズムの両者の存在に対する並行的認知を行った。これは文学固有の問題の視点からのロマンチズムとリアリズムの解明、「芸術のための芸術」と「人生のための芸術」の郭沫若なりの解明であり、リアリズムへの彼の接近を意味した。

③「文芸家的覚悟」（1926・3・2、『洪水』第2巻16期、1926・5・1）等で、郭沫若は、それ以前の自らの小ブルジョア知識人としての「個性」（自我）と「自由」を、理論的に総括し発展的に継承するのではなく、第三階級（有産者階級）のものとしてすべて切り捨てて否定する。その上で自己犠牲的に直接的に中国変革に貢献する姿勢を示した。<sup>(56)</sup>

④さらに「革命与文学」（1926・4・13、『創造月刊』第1巻3期、1926・5・16）では、新旧文学の継承性を断ち切り（それは旧来の自らの「個性」<自我>を否定したことと対応する）、

⑤その上で、その時代の特殊な状況（時代精神、革命）に主として規定される文学の在り方を提示した。

⑥また、当時の状況下においては、無産階級に同情を表す、社会主義的、リアリズムの文学を目指す、とした。

上記の点を手がかりとして、下記の問題を追求していくことにする。河上肇の所論が、1924年頃以降の郭沫若の革命文学論に対して、とりわけその基礎的部分において、どのような影響を与えている、と考えることができるのか。以下二点に分けて論を進めたい。

#### 一、「自由」「個性」についての位置づけ

『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（弘文堂書房、1922・12・5）「中篇 第3章 社会主義制と個人主義的自由」において河上肇は以下のように論ずる。

個人主義的組織の下においては、その成員は自らの経済的生存について各自責任を持ち、社会は責任を負わない。また他方そのため、社会は成員個人の経済生活に対して干渉を加えない。この個人主義制は近代社会の資本主義制として現れる。個人主義制の下での自由とは、資本家の企業の自由を実質的に意味しており、貨物の生産と交易の自由、財産の所有と処分の自由を内容

とする。労働者は労働力を売る自由を持つが、しかし労働者は資本家階級全体に縛りつけられている。故に個人主義制下の自由は、基本的に有産者の自由である。

個人主義制に対して社会主義制は、社会がその成員の生活を保障することを原則とする。このため社会主義制は必ず公の機関を設けて、社会全体の生産及び分配を管理する。社会主義制の下で生まれる新たな自由とは、資本家階級の搾取からの自由である。

さらに、「中篇 第4章 社会主義制の下における個人の生活」では、ボルハルトの『科学的社會主義序論』（1919）の翻訳に基づいて、次のように紹介する。

共産主義の完成期においては、巨大な生産力の発展が実現される。これによって、「各人は各々其の得んと欲する所のものを得る」ことができるようになる。同時に、そのため従来資本主義的国家の下では経済上の欠乏のために抑圧され消されていた被抑圧者の人格が、始めて十分な自由と多様性において発展することができることとなる。

さて一方、郭沫若は、「文芸家的覚悟」（1926・3・2、『洪水』第2巻16期）で次のように言う。

「現代の社会では重んずべき個性やら、自由はない。個性とか自由とかを重んずる人は、第三階級のために発言しているのだ、と言える。もしも君が、『個性を持つことを許されず、自由を持つことを許されないときには、反抗しなければならぬ』と言うのであれば、それは好都合だ。私達は一本の路を同行する人間だ、と言うことができる。君が個性を主張し自由を主張しようとするならば、先ず個性を阻害し自由を阻止する者を打倒しなければならない。しかし君は同時にまた、他人の個性を阻害したり他人の自由を阻止したりしないようにすべきだ。さもなければ君は人に打倒されるであろう。このように徹底的に自己の個性を主張できるようにし、徹底的に自己の自由を主張できるようにすることは、これは有産の社会では不可能事である。それでは、友よ、君が反抗の精神を持っている人であるからには、当然私と同一の路を歩いて行くはずだ。私達はしばらくは、自己の個性と自由を犠牲として、大衆の個性と自由のために困難を取り除くよう追求することができるだけなのだ。」

郭沫若によれば、現代社会では重んずべき個性やら、自由はない。それらは

有産者の個性であり、自由である。それらを重んずる人は、第三階級（有産者階級）のために発言しているのである。徹底的に自己の自由・個性を主張できるのは、有産者社会では不可能である<sup>(157)</sup>。さらに郭沫若は次のように言う。

「私達が今必要とする文芸は、第四階級（労働者階級のこと—中井注）の立場に立って語る文芸である。この種の文芸は形式上はリアリズム<sup>(158)</sup>であり、内容上は社会主義である。」（同上）

郭沫若は、個人主義制（近代社会の資本主義制）下における自由・個性が有産者のものであり、社会の大多数の者がそれらを獲得し発展させるのには、別の社会体制（社会主義制）が必要となる、という認識を語る。故にこれまで郭沫若自身が小ブルジョア知識人として享受してきた自由・個性も有産者の自由・個性に属する性質のものである、と考えられ、それを否定した上での、第四階級の立場に立って語る文芸を提起する<sup>(159)</sup>。こうした自由・個性に対する郭沫若の認識は、基本的に河上肇の認識を一つの基礎とするものであった、と推測される。言い換えると、郭沫若のこうした認識は、河上肇の自由や人格に関する所論を基礎的部分の一つとして形成された可能性がある。

## 二、新旧の文化の断絶の関係、及び精神的文化に対する物質的説明

河上肇によれば、個人主義制（近代社会の資本主義制）下の自由は、実質的に資本家の企業の自由であるとされたことについては、前に触れた。

「個人主義制と社会主義制とは以上の如く相違しているのであるから、個人主義制の下に認めらるる所謂自由が、そのまま社会主義制の下に認められざるは、自然の数である。私は先きに個人主義制の下に認めらるる自由は、有産者的自由とも称さるべきもので、資本家的企業の自由を重心とするものだと述べたが、此の如き自由は、勿論社会主義制の下に於て認むべからざるものである。」（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』

「中篇 第3章 社会主義制と個人主義的自由」<sup>(160)</sup>）

個人主義制の下の有産者的自由は、社会主義制の下では当然認められない、と言う。さらに河上肇は次のように指摘する。

「社会主義制の下に在っては、個人主義制の下における有産者的自由は総て蹂躪され、有産者的自由の上に発生せし文化も亦た総て破壊されて仕舞う。有産者階級が社会主義に対し極端なる反感を有するは勿論、有産者的文化以外に文化あり得るを知らざる人々が、等しく社会主義の弊害を愁訴

するも亦た当然のことである。」(同上)<sup>(61)</sup>

社会主義制の下において、有産者的自由及びその上に発生した文化はすべて蹂躪破壊される、とする。故に有産者的文化と社会主義制の下における文化とは、すなわち新旧の文化は、断絶の関係におかれる。(同時に、上記のように言及する河上肇は、有産者的文化以外の文化の存在を念頭に置いていた、と思われる。)

また河上肇の『唯物史観研究』(弘文堂書房、1921・8・25、底本は、『河上肇全集 第11巻』<岩波書店、1983・1・24><sup>(62)</sup>)によれば、マルクスの唯物史観には、①社会組織進化論とも言うべきものと、②精神的文化についての物質的説明とも言うべきものの二つの部分があるとする(唯物史観が過去の階級社会に適用されるときには、マルクスの階級闘争説が生ずるのであり、階級闘争説が上の二つの部分のいずれにも貫通する)。後者の②は、社会組織(社会の経済的構造)がいったん変動すると、社会に流行する宗教・芸術・哲学等がまたそれに伴って変動せざるを得ないというものである。

「『物質的生活の生産方法は一般に、社会的の、政治的の、及び精神的の、生活過程を条件づける。人類の意識が其の存在を決定するのでなくて、寧ろ之に反し、彼等の社会的存在が其の意識を決定するのである。』」

(『『経済学批判』序言』、『唯物史観研究』<前掲>所載、河上肇による傍点は省略)

またマルクスの唯物史観は、過去の階級社会に適用された場合、精神的生活についての物質的階級的説明ともなる。

「『蓋し人間の観念、見解、及び概念が、一言にして蔽えば彼等の意識が、彼等の生活関係と共に、彼等の社会的聯絡と共に、彼等の社会的存在と共に、変化するものなることは、深き洞見を俟たずして吾等の観念し得る所である。』」

思想の歴史の証明する所は、精神的生産が物質的生産に伴うて変化する、と云うことで無くして何であるか?一の時代の支配思想は、常に只、支配的階級の思想である。』」(『共産宣言』、『唯物史観研究』<前掲>所載、河上肇による傍点、独語原文、注は省略)

河上肇によれば(『唯物史観研究』「第7章 唯物史観の要領」)、社会経済の進歩に伴って、従来抑圧されてきた階級が次第に経済上の勢力を得てくると、ついには社会を支配する階級と政治闘争を始める。精神的方面にお

いては、抑圧されていた階級が階級的自覚を持つにつれて、次第にその階級の利益を代表する新たな思想が起こってくる。こうして経済上、政治上、思想上の闘争において、もしも新興階級が勝利を取れば、そこで始めて社会的革命が成就する。その場合、新しい経済組織が古い経済組織に比べて根本的に性質を異にしているならば、社会思想もこのために全く面目を一新し、新しい政治上の思想、新しい宗教上の信仰、新しい道徳上の観念、新しい芸術上の趣味、新しい哲学上の学説等が次々と起こり、このようにして、社会はその変動の一段階を経過し完了する。河上肇はこのように論ずる。

さて一方、郭沫若は文学を歴史的に分析して次のように言う。

「現在、文芸に対する私の見解もすっかり変わった。私は、一切の技術上の主義は問題となりえない、問題としよう点は、ただ、昨日の文芸、今日の文芸、明日の文芸ということのみである、と考える。昨日の文芸とは、生活の優先権を無自覚に占有している貴族の暇つぶしの聖なる品である。例えばタゴールの詩・トルストイの小説のように、たとえ彼らが仁を語り愛を説くとしても、私は、彼らが餓鬼に布施を施しているように思うだけだ。今日の文芸とは、私達が現在革命の途上を歩いている文芸であり、私達被抑圧者の呼びかけであり、生命にせきたてられた叫びであり、闘志の呪文であり、革命の予期する歓喜である。この今日の文芸が革命の文芸であるということは、私は、過渡的現象であるが、しかし不可避の現象であると考え。明日の文芸とはどんなものなのか。（中略）これは社会主義が実現した後で、始めて実現できる。」（「孤鴻」、1924・8・9、『創造月刊』第1巻2期、1926・4）

郭沫若によれば、文学はその時代の社会状況・階級関係によって基本的に規定される。昨日の文芸は貴族の文芸であり、今日の文芸は被抑圧者の呼びかけである。昨日の文芸と今日の文芸の間には、文芸の継承関係はなく、その時代時代の社会状況・階級関係によって、孤立的に存在する。<sup>(63)</sup>（新旧文学の断絶と社会状況に規定される文学）

また郭沫若は「革命与文学」（1926・4・13、『創造月刊』第1巻3期）で次のように言う。

「対立する二つの階級があつて、一つは元来の勢力を維持しようとし、一つはそれを覆そうとする。このようなときにおいては、或る階級には当然その階級の代言人がおり、どちらかの階級の立場に立って発言するもので

あることが分かる。もしも抑圧階級の立場に立つのであれば、当然革命に反対するはずだし、もしも被抑圧階級の立場に立つのであれば、当然革命に賛成するはずである。」（「革命与文学」、1926・4）

郭沫若によれば、作家の語る内容がどの階級の立場に立つものかによって、文学の性格が規定される、とする。例えば抑圧階級の立場に立つものであることにより、「反革命の文学」となり、或いは被抑圧階級の立場に立つことにより、「革命の文学」となる。郭沫若の論議は、当時においては、社会の側から時代の側から、真正面に文学の在り方を問う重要な提起であった、と思われる。しかし逆に言えば、これは階級の見地・分析のみからする、文学に対する性急な裁断を免れていないであろう。言い換えると、郭沫若は、文学と、文学を創造する作家の内面（自己・個性—それは社会関係の総和と言うことはできても、必ずしも階級のみでは説明しきれない）の関わりを、作家の内面の要求・構造から説明するのではなく、むしろ作家の階級的立場が作家のあらゆる内面を規定し動員して、その内面の表現となる、と考える。作家の社会的状況・階級関係がその文学の内容を一方向に規定する、とする。

また文学と革命の関係について、郭沫若は歴史的には次のように定義する。「社会進化の過程において、どの時代も不断に革命しつつ前進するのである。どの時代にもそれぞれの時代精神があって、時代精神が一変すれば、革命文学の内容もこれによって一変する。ここにおいて私は数式で表すことができる。

すなわち、

革命文学 = F（時代精神）

もっと簡単に表せば、つまり

文学 = F（革命）

これは言葉で表現すると、文学は革命の関数なのである。文学の内容は革命の意義に従って変化する。革命の意義が変われば、文学はそれによって変化する。革命はここにおいて自変数であり、文学は被変数である。

（中略）第一の時代において革命的であっても、第二の時代には非革命的なものとなる。第一の時代において革命文学であっても、第二の時代には反革命の文学となる。」（「革命与文学」、1926・4）

郭沫若は、文学の内容は時代の革命の意義によって規定される、とする。文学（革命文学）の内容がそれぞれの時代の革命の意義（時代精神）によって

変化するように、革命が自変数であり、文学が被変数である。それ故に文芸固有の継承性、文芸固有の内在する課題の歴史的経過・展開は、革命という自変数の変化によって、そのたびごとに断ち切られる。そればかりか、たとえ或る第一の時代において革命文学であっても、次の第二の時代に移行した時点においてそれが反革命の文学（或いは非革命の文学）となる、とする。故に例えば、或る第二の時代における革命文学が、意義上反革命に転化している前代の「革命文学」（或いは非革命に転化している前代の「革命文学」）から継承するという課題は、成立しにくいこととなる。

言い換えると、1926年頃における郭沫若の革命文学論は、革命文学が前代の（或いは過去の）文学をほぼ全面的に切り捨て否定しつつ（新旧文学の継承性の切断）、その時代の特殊な社会状況（時代精神、革命）に規定される、と主張する。そしてその分析の中心的見地は階級的観点にあった。<sup>(6.4)</sup>

こうした郭沫若の革命文学論における理論的背景の基礎的部分の一つとして、河上肇の上記の所論が存在する可能性がある、と私は推測する。

この場合の河上肇の所論とは、上述してきた次のような諸点を指すものである。①古い経済組織が新しい経済組織へと根本的に変化した場合、社会思想も面目を一新し、芸術上の趣味も新たに起こる。例えば蹂躪破壊される有産者の文化と、社会主義の下における新文化とは断絶の関係におかれる。<sup>(6.5)</sup>（経済的社会的状況の変化に伴って変化する文化、その場合における新旧文化の断絶の関係）②精神的生産は物質的生産に伴って変化する。物質的階級の生活の関係は精神的生活の過程を条件づける。（精神的文化の物質的階級的説明）③こうした考え方を貫く根本的見方として、当時の河上肇の所論には階級闘争説が存在した。<sup>(6.6)</sup>

以上小論の五章にわたって、私は、郭沫若が人生の転換点においてその方向を定めるにあたり、河上肇の所論が大きく深く作用した具体的内容を確認してきた。（それは、郭沫若が1926年7月北伐戦争に直接参加するための、内面的必然性を準備する一環であると考ええる。）また郭沫若のこの時期の文芸観における追求・飛躍において、その後の革命文学論において、その基礎的部分に河上肇の所論の影響があると推測し得ることを述べた。<sup>(6.7)</sup>そしてこの時期の両者には、当時のマルクス主義研究の一段階の刻印が鮮明に打たれている、と思われる。河上肇においては、マルクス主義研究に対する彼自身の開拓し進展する過程の刻印が見られる。郭沫若においては、河上肇のマルク



ス主義研究の一段階の刻印が様々な形態において反映されて現れ、また世界のマルクス主義文芸理論の当時における研究段階の刻印が推測される。<sup>(168)</sup>

〔注〕

- (55) : この点については、注5（「郭沫若と『社会組織と社会革命に関する若干の考察』〈河上肇著〉についてのノート〈上〉」、『名古屋大学中国語学文学論集』第8輯、1995・9）を参照されたい。
- (56) : 「文芸論集序」（1925・11・29、『洪水』第1巻7期、1925・12・16）で、郭沫若は同趣旨のことを述べる。
- (57) : 郭沫若は「孤鴻」（1924・8・9、『創造月刊』第1巻2期、1926・4・16）で次のように言う。

「私達は現在純粹な科学者、純粹な文学者、純粹な芸術家、純粹な思想家となることはできない。このような人になりたいのであれば、相当な天分がなければならぬことは言うまでもない、しかしまた相当な物質的保証もなくてはならない。（中略）私達に共通する煩悶、倦怠（これは我が中国青年全体に共通する煩悶、倦怠である）は、自我の完成を追求するこうした幸運が私達にはなく、自由に発展する幸運を万人のために図る道筋をいまだに探し出すことができないでいることだ。私達の内部要求と外部的条件は一致することができず、私達は道標を失い、無為に陥る。」

また、郭沫若は「馬克斯進文廟」（1925・11・17、『洪水』第1巻7期、1925・12・16）で、マルクスの発言として次のように記す。

「私達は先ず歴史に基づいて、社会の産業には漸次増殖する可能性のあることを証明し、次に漸次増殖する財産が段々と少数の人の手に集中し、そのため社会に貧乏という病を生み出させ、社会の闘争が永遠に止む日のないことを証明するものです。（中略）私達は一方巨大な力によって個人の財産を剥奪しますし、同時にまた巨大な力によって社会の産業を増殖させようとします。産業が発達し、み

んがそれを共に享受する可能性ができましたら、その後こそみんなが安心専心して平等無私に自分の本能や個性を発展させることができます。この力の原動力は言うまでもなく私有財産を廃止することに賛成する人々であり、無産の人々であると言うことができます。（中略）このように進行していきますと、みんなが物質上精神上において、十分に各自の要求を等しく満足させることができ、人類の生存はその後始めて最高の幸福を得ることができます。」

- (58) : この頃、河上肇のリアリズムについての言及はほとんど見られない。ただ、「人間の自己瞞着性」（『社会問題研究 第20冊』、1920・11・1、底本は、『河上肇全集 第11巻』<岩波書店、1983・1・24>による）で、空想的社会主義の誤謬を指摘しつつ、河上肇は次のように言う。（しかしこの言及が郭沫若に対して何らかの直接的影響をもたらしたというのではなく、今のところ単に参考として挙げるにすぎない。）

「予想に対する希望の投影は、之を如何にして防ぎ得るか。私は矢張り科学の力に頼るの外あるまいと思う。まことに、社会の改造に関する此種の幻影を照破するは、社会の変動に関する科学的智識の精髓たる、かの唯物史観の任務とする所でなければならぬ。クローチェの言う如く、唯物史観の根本精神はリアリズムである。そのリアリズムに照らさるる時、一切の幻想はその影を消す。私は今、リアリズムのその力を慕う。（中略）

しかし大勢の人々が、自分で自分を瞞したり、他人に瞞されたりして、惨めな生活を只主観的にのみ合わせだと観念して、暮らしているような、暮らさなければならぬような時代は、もう過ぎ去ったのではあるまいか、過ぎさせなければならぬのではあるまいか。少くとも私自身は、消極的に『無智の幸福』に落ち付いているよりも、在るがままに事物を観て、積極的に事実の上に幸福の世界を創造して行きたいものだと思う。それ故私は矢張り、リアリズムの福音を説かねばならぬのである。」

- (59) : 私は、以前拙稿「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』提唱についてのノート（下）」の注28において、郭沫若が人生の岐路においてクロポトキンと同種の選択をしたことを述べた。その概略を記

すと、第一期創造社（1921・6—1924・5）の終焉間際に、郭沫若はその維持継続の困難さを知って、成仿吾一人を上海に残し、1924年4月日本へ渡る。郭沫若は、中国の現実から離れて、九州帝国大学医学部で生理学研究を志そうとする。しかし中国の現実から遠ざかろうとすればするほど、現実の引力は強く、終に生理学研究の道を捨てて、中国変革の道を探るべく社会科学を勉強し始めることとなる。（それより先1923年林靈光は、「致青年的第二信」＜『創造週報』第6号、1923・6・16＞で、クロボトキンの『ある革命家の手記』の一節を意識して、青年にその人生観を問いかけている。それは、後述のフィンランドの地質調査の過程での、人生の岐路におけるクロボトキンの選択を紹介する。）郭沫若は1924年中頃河上肇の『社会組織と社会革命に関する若干の考察』の翻訳を完了し、1924年11月上海に戻って以後、五年の時間をかけての『資本論』の翻訳を企図する。しかし商務印書館の同意を得ることができなかった。また、1925年5月30日、五・三〇事件を目の当たりにし、その後1926年3月広州中山大学へ赴任し、同年7月北伐戦争に直接総政治部秘書長として参加する。

中国の現実から離れて生理学研究の科学者として生きる路を断念し、むしろ中国変革にいかに参加するか、いかにそれを実現するか、を追求し、より直接的な貢献の道を選択する。

こうしたクロボトキンの選択を行う生き方を、河上肇は1922年1月の「個人主義者と社会主義者」（『改造』第4巻5号、1922・5・1、この文章は有島武郎の「宣言一つ」＜『改造』第4巻1号、1922・1・1＞に触発され書いたもの、との断りがある。底本は、『河上肇全集 第11巻』＜岩波書店、前掲＞）において、精神的意味での「社会主義者」と言う。ここで河上肇の言う非エゴイスト（精神的意味での「社会主義者」）とは、例えばクロボトキンのように、多数の民衆の現在の不幸を強く感じとり、自らの研究者としての高い喜びを捨て、すでに得られた知識を民衆に普及することに尽力するような人である。当面する民衆・弱者の問題解決のために直ちに献身しようとする人である。

それに対して、河上肇の言う「個人主義者」とは、精神的意味での「個人主義者」であり、例えばミレーやレンブラントのように、自ら

の仕事に最高の価値を認め、一切のものをそのための犠牲とし手段とする。民衆のためでもなく、社会のためでもなく、自らの芸術を高めること以外のことは顧慮するところではない。それは徹底したエゴイストである。

河上肇は、どちらの型の間人も、その善いものは社会の宝だとする。世の中の時勢によって、退いて百代の計を樹つべき時代もあれば、出でて一世の業に尽くすべき時代もある。そして現在は、人類の物質的境遇の改造が最大の急務となっている、とする。

「『ある日の講話』の河上肇（内田義彦、前掲）によれば、1922年当時、河上肇は「福田博士の『資本増殖の理法』を評す」（『社会問題研究』第31冊-第34冊、1922、後、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』に所収）を執筆しており、彼に迫りつつある「選択」とは次のような内容だった、とする。

「彼に迫りつつある選択は、社会主義の側に身を置く精神労働者の前にある二つの道、社会主義の理論をゆっくりと時間をかけて創りあげてゆく創造者-個人主義者-の道か、そうした創造を捨てて、『既に得られた知識』を民衆に普及して社会当面の必要に応じる伝播者たるか、の選択である。」（「『ある日の講話』の河上肇」、傍点は省略）

河上肇のこの「個人主義者と社会主義者」（1922・5）という文章を、林靈光（郭沫若に『社会組織と社会革命に関する若干の考察』を貸し、人生の岐路におけるクロボトキンの選択を『創造週報』第6号<1923・6>で紹介した人）が、読んでいたかどうか、今のところ私には判断できる材料がなく、分からない。また郭沫若が読んでいたかどうかについても、分からない。

しかしながら郭沫若は、1920・21年頃の、反映論の範疇の下に基本的にありつつ、創作と作用を二元的に切り離し、芸術それ自身の価値のみを追求する「個人主義者」的在り方（芸術のための芸術の追求）から、1922・23年頃より芸術の創作と作用における内的連関・社会的連関を確認するようになる。そして1925年の「文学的本質」（1925・7）においては、ロマンチズム（自我の表現の重視）とリアリズム（客観的精確の重視）の並行的認知を行う。芸術のための芸術と人生

のための芸術の、文学の本質から見た一致と、方法上での違いの確認、そして両者の存在の並行的認知を行った。郭沫若はこのように、1924年生理学研究者としての道を断念し、1925年から26年にかけては文芸観上の一つの拡大・跳躍を行い、また自己のブルジョア知識人階級としての個性・自由を全否定しつつ、民衆の個性と自由の獲得のために1926年7月北伐戦争に直接に参加する。言い換えると、郭沫若は、「個人主義者」から徐々に進みつつ、社会科学に接近し、文芸観上の一つの拡大・跳躍を経て、「社会主義者」の方向へと振幅の大きな転回を行ったと思われる。

もしも誤解を恐れずに言うならば、恐らく、日本の知識人河上肇、そして有島武郎（私は有島について、「魯迅と『壁下叢書』の一側面」<『大分大学経済論集』第33巻4号、1981・12>、「有島武郎と魯迅」<『言語・人間・文化』、名古屋大学公開講座委員会編、1990・9・1>で若干述べたことがある）等と中国の知識人郭沫若、成仿吾そして魯迅等も、時代の転換期において各人の意味あいでの「個人主義者」から「社会主義者」へと、それぞれの転回の仕方をしたと思われる。その中に各作家の良心・精神の在り方を見ることができると思われる。

なお河上肇と有島武郎の交流の経過については、『河上肇 芸術と人生』（杉原四郎・一海知義、新評論、1982・1・10）の「有島武郎」の項に詳しい。

(60) : 郭沫若は次のように翻訳する。

「个人主义制与社会主义制有如上之相异、所以在个人主义制所认定的自由不能照样为社会主义制所承认的、这是必然之数。我在前面说过、个人主义下所认定的自由是可以称为有产者的自由、不待言是不能为社会主义制所承认的。」（「中篇 第三章 社会主义制与个人主义的自由 第三节 社会主义制之特征一生产及分配之國家的管理」）

(61) : 郭沫若は次のように翻訳する。

「在社会主义制下时、凡是在个人主义制下的有产者的自由全被蹂躏、在有产者的自由上所发生的文化亦全被破坏。有产者阶级对于社会主义怀着极端的反感是不待论、在不知有产者的文化

以外更有文化存在的人们同样愁诉着社会主义之弊害的也是当然的了。」（「中篇 第三章 第三节 社会主义制之特征—生产及分配之国家的管理」）

また河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「中篇 第3章 第4項 社会主義制の下における労働の義務」で次のように言う。

「マルクスの言っているように、一つの制度から他の制度に移ろうとする時、古き制度の『悪しき方面』を去って『善き方面』をのみ保留せんとする企ての総て不可能なるを信ずるが故に、個人主義的自由が社会主義制の下に於て全く蹂躪し去らるるの事実を、只ありのままに見たいと思うものである。」

この文章を、郭沫若は次のように翻訳する。

「我相信马克思所说的由一种制度推移向他种制度时、想除去旧制度之『恶的方面』而保留其『善的方面』之全不可能；所以我对于个人主义的自由在社会主义制下全被蹂躪的事实、只想作如实的观察。」（「中篇 第三章 第四节 社会主义制下劳动者之义务」）

- (62) : 『唯物史観研究』の少なくとも一部には、郭沫若が目を通してしたことについて、注51（「郭沫若と『社会組織と社会革命に関する若干の考察』〈河上肇著〉についてのノート〈中〉」、『名古屋大学中国語学文学論集』第9輯、1996・9）ですでに触れた。
- (63) : このように文芸を昨日の文芸、今日の文芸、明日の文芸と切り離して分析する考え方は、河上肇の次のような発想と類似点がある。

「畢竟マルクスの社会主義は、過去に関する理論と、現在に関する理論と、将来に関する理論と、此三者に分ち得ることと思う。第一の過去に関する理論と謂うは、即ち唯物史観を指すのであって、之は過去の社会組織は果たして如何なる原因と経過とを以て変革し来りしや、と云う問題に関する理論である。第二に現在に関する理論と謂うは、第一の歴史観に対して経済論と謂うべきものであって、現在の経済組織たる資本主義的組織に対し分析的解剖的研究を為し、その必然の運命を予言せんとしたるものである。されば第一部の理論を別に社会組織進化論と名くるならば、此第二部の理論は之

を資本主義的経済論と名くべきである。(中略) 第三の将来に関する理論と謂うは、如何にして社会主義を実現せしむべきかの手段方法に関する政策論である。(中略)

要するに、唯物史観と資本論と社会民主主義と、この三の者が、理論及び実際の両方面に互るマルクス主義の三大原理である。而して此等のものは、既に述べたる如く、決して離れ離れのものではなく、極めて密接なる連絡を有するものであるが、今此等三大原理の根本を縫うて一本の金の糸の如くに走る所のものは、所謂階級闘争説である。」(『近世経済思想史論』、岩波書店、1920・4・10、底本は、『河上肇全集 第10巻』<岩波書店、1982・10・22>による。)

このような類似点が、すなわち対象を昨日(過去)、今日(現在)、明日(将来)と分離して分析し、その全体を貫く根幹の考え方として階級闘争を置くという発想の類似点が、両者に存在することを、指摘しておきたい。

- (64) : 見田石介は、『芸術論』(三笠書房、1935・5、底本は、『見田石介著作集 補巻』<大月書店、1977・4>による)で次のように指摘する。

「テーヌは次のような結論を下す。

『そこでわれらは次の法則を提出するところに達したのである。即ち一個の芸術品なり、一芸術家なり、一群の芸術家なりを理解するには、それらの属していた時代の精神、風俗の総体を正確に頭に浮べねばならぬということである。其処に最後の解釈がある。其処に残余を決定する第一原因が存するのである。』

これがテーヌに於ける中心的な思想である。」

さらにテーヌの欠陥を指摘し次のように言う。

「テーヌに見出される欠陥は、一定芸術が一定社会に相応するといういわば横の連関は見られるが、あらゆる時代の芸術と言わずとも、継続せる二つの時代の芸術のいわば縦の発展が見られないことである。(中略) 彼(テーヌのこと一中井注)は無連絡な各時代の芸術を得たのである。」

こうした欠点は、プレハーノフやフリーチェの芸術社会学にも免れ

なかったとして、見田石介はさらに次のように指摘する。

「フリーチェは、芸術社会学のためには不可欠な要件である社会の発展を段階づけ、各社会を基本的に特色づけるもの（生産力の発展段階）（いわば縦の連関）と、一定社会に於ける芸術と社会との対応関係を、現象の錯綜の中から導き出してくるための公式（いわば横の連関）とを兎に角見出したのである。（中略）

だがこれらの偉大な功績にも拘らず、芸術社会学には種々なる誤りがある。最も重大なものと思われるのは、フリーチェの芸術社会学に於いては、一定の芸術と一定の社会との対応関係を、いわば『自然科学』的に説明するという事に厳密に止り、現代の見地からの過去の芸術の評価ということも或る客観的基準からの評価ということも許されないことである。このことから芸術史と芸術批評とが截然と分たれる。」

「このため各時代の芸術がそれぞれの社会で、各々それ相当の任務を有っているものとして、その価値が相対化され、過去の芸術の客観的価値がわれわれに一向分らぬことになり、芸術の歴史も一つの発展史ではなく、ばらばらのものになる。（中略）『たとえプロレタリアートに必要な芸術』が価値あるものだという基準が立てられ、この基準によって現代の芸術の評価が行われるとしても、即ちプロレタリア芸術のブルジョア芸術、小市民芸術に対する優越が証せられるとしても、このプロレタリア芸術と過去の傑出したブルジョア芸術、貴族の芸術との関係が一切解らない。どちらが優れているのかは一切解らない。現代と過去とは断ち切られているのだから。」  
またさらに見田石介は次のように指摘する。

「（芸術社会学者にとって一中井注）特定の芸術は特定の階級の利害、心理を反映するということが、芸術の本質の全部になっていた。」

「フリーチェは芸術の階級利害への奉仕の面をのみとって、芸術の機能の全部としている。」

このように見てくると、郭沫若の革命文学論が、プレハーノフ（1856—1918）や、フリーチェ（1870—1929）の芸術社会学と、いかに多くの共通性を持っていたかということが分かる。

(65) : 祖父江昭二氏は、『二〇世紀文学の黎明期』（新日本出版、1993・2）



で日本の「プロレタリア文学」について次のように指摘する。

「二〇年代以降の『プロレタリア文学』は、近代あるいは現代の日本文学の歴史にかけがえのない寄与をした。と同時に、歴史的な制約もあり、未熟な面、弱点もあった。自民族ひいては人類の遺産を継承する点で弱かったことも、それが背負ったマイナス面の一つ、しかも軽視できないマイナス面の一つであった。だが、この弱点は、文学・芸術を非社会的・超階級的な所産と見る伝統的・支配的な文学観・芸術観に抗し、文学・芸術を歴史的・社会的な所産ととらえ、それゆえ階級社会の文学・芸術の『階級性』を主張するといった画期的で革命的な文学観・芸術観自体が、当時やや簡略に受容された、いわゆる『史的唯物論』の入門的な理解に導かれていたために、かえって逆に生じた弱点だった。『史的唯物論』によって過去の遺産の『階級性』、その敵対性・限界性が指摘され、むしろそれらを否定するところに『プロレタリア文学』が成立するという論理に支えられていた。つまり、マルクス主義による『社会』の発見、史的唯物論による『階級』の発見という、日本の歴史の上で革命的な意義を持つ思想・理論上の積極的な寄与が、『生成期』に不可避の未熟さのゆえに、遺産の拒否というマイナス面と不可分に結びついていたのである。それゆえ問題は決して単純ではない。詳述は避けるが、この歴史の遺産継承の問題領域で見られた狭さ、閉鎖性は、同時に、同時代的な作品・作家・文学動向を評価する問題領域でも見られた。一言で言えば、統一戦線戦術的発想・把握の未熟の問題である。」

郭沫若の1924年頃から1926年にかけての革命文学論には、上に指摘されたと同様の、優れた点とともに、弱点も免れなかったと言える。

- (66) : この点については注63を参照されたい。なお、河上肇自身も当時マルクス主義の受容形成過程にあったことは前に触れたとおりで、後、弁証法的唯物論に対するより深い理解を通じて、こうした考え方を克服していった、と思われる。
- (67) : なおそのほか、郭沫若が河上肇の所論から学ぶところがあった可能性のある点、暗示を得た可能性のある点について、あるいは単なる発想の類似している点等について、3つの例を取りあげておく。

①郭沫若は、「革命与文学」（1926・4・13、前掲）で次のように言う。

「社会構成の基本精神は一体どこにあるのか。私は、人類社会の構造は最大多数の最大幸福を求めるところにある、と信ずるものである。」

河上肇は、「『労働収益全部に対する権利』に就ての一考察」（『社会問題研究』第22冊、1921・4・20、底本は、『河上肇全集 第11巻』<岩波書店、前掲>）で次のように言及する。

「この『政府に就て』と題する論文（ジェイムズ・ミル著一中井注）は、勿論一の政治論であるけれども、元来ベンタム流の政治説によれば、政治の目的は最大多数の最大幸福を実現することに存し、而して其の幸福なるものは物質的の富に依存するもの最も多きが故に、その関係よりして、彼等の政治論は殆ど経済政策論の実を具うるに至れるものである。今ミルの『政府に就て』に見われたる政治論を見るも、此の関係は特に著しい。」

この後の部分で、河上肇は、ミルの所論の最大多数の最大幸福の内容を詳しく論ずる。また河上肇は『資本主義経済学の史的発展』（弘文堂書房、1923・8・20、底本は、『河上肇全集 第13巻』<岩波書店、1982・3・24>による）の「第4章 ベンタム（Jeremy Bentham、1748—1832）及びジェイムズ・ミル（James Mill、1773—1836）」でも、ベンタムの「最大多数の最大幸福」について詳しく紹介する。このように、郭沫若の「最大多数の最大幸福」の言及が、河上肇の所論に由来する可能性も考えられる。

②郭沫若は、「盲腸炎与資本主義」（『洪水』週刊第1期、泰東図書局、1924・8・20、後に、『洪水』第1巻2期、光華書局、1925・10・1に再録）で、資本家を社会の盲腸に喩える。

「資本家は社会の盲腸である。彼らは社会に対して何らの貢献もしない。彼らの主義は労働者の体力を搾取し、剰余価値（利潤）を獲得することにある。」

郭沫若は、資本家の営利精神が拡大再生産を行わせ、生産における無政府状態・自由競争によって、需要供給のバランスが崩れ、産業が停頓し、社会の恐慌が起こる、とする。この解決は社会主義制度の下

においてのみ可能である。

「私はこの病氣（盲腸炎一中井注）を見るたびにいつも個人資本主義を連想する。」

河上肇は、「或医者の独語」（『大阪朝日新聞』、1919・1・1、底本は、『河上肇全集 第10巻』＜岩波書店、1982・10・22＞）による）で次のように言う。

「吾輩の診断に依るに、彼は貧血の重病人である。」「彼の病源は盲腸内の寄生虫に在る。盲腸内に大きな寄生虫が居て、其が全身の栄養を吸収する為に、此の如く甚だしき貧血症に陥って居るのである、いくら栄養物を摂取しても、相変らず痩せて居るのは、其の為である。」「寄生虫と謂うは、労働者細胞と異り、其は身体全体の為には何の働きもせぬ者である。全体から少からぬ利益を受けながら全体の為には何の働きもせぬ坐食者である。然るに此坐食者が、今日の所では栄養の大半を吸収して仕舞って、総ての労働者細胞をば、過度の栄養不足と労働過剰に陥らしめつつあるのである。」

郭沫若は医学を学んだ人であり、盲腸によって資本家を比喻するのは自然なことである。また両者の文章は時期的にも隔たりがあって、内容も少しく異なる。このことから郭沫若の文章は、必ずしも河上肇の所論とは直接的関係がない、と思われる。ただ、ここでは両者の発想の類似の例として挙げておきたい。

③郭沫若は、1924年7月22日付け何公敢宛て書簡（「社会革命的時機」＜前掲＞所収）で次のように言う。

「私は、社会生活が共産制度へ向かって進むことは、百川の海に帰するように、必然の道である、と深く信じています。現在様々の改革に従事するとき、精神的にはこの自覚をいつも持つべきです。すなわち最も近い道筋をとって、海へ向かわなければなりません。私は、産業が進歩していず、物質条件が備わっていない国において、社会主義の実現を目的とする政治革命は早ければ早いほどよい、と信ずるものです。ロシアが絶好の例です。政治と経済は同時に解決することはできません。要は政治の改革が経済の改革を目的とするところにあります。現在中国において個人資本主義を提唱奨励することは全く無意味なことです。それは海の遠いことを心配して、河

道に先ず大きな湖を掘ろうとするもので、社会の進行を阻害します。」河上肇は、「断片（三）」（『社会問題研究』第8冊、1919・9・8、底本は、『河上肇全集 第10巻』＜岩波書店、前掲＞）で次のように言う。

「マルクスの唯物史観は槩に一種の必然論である。乍併、マルクスは其必然論の為に、『我等は手を拱いて資本主義の瓦壊と共産社会の出現とを俟てばよいのである』と主張した訳では無い。（中略）天下の水は必然的に海に注ぐという必然論を会得したからと云って、吾等は必ずしも治水の事に無為拱手の態度を採らなければならぬと云う筈は無い。否な寧ろ其逆である。吾等は水に関し一定の必然性を理解すればこそ、始めて巧に水を治め得る。（中略）水は必然の勢を以て海に注がんとして居る。それを全部陸上に停め、海水を皆無ならしめんと企つる者あるならば、是れ世界を挙げて大洪水の災厄に陥れんとする者、吾等は全力を尽してその無用有害なる計画に反対せざるを得ぬ。水の必然性を理解し居れば居るほど、斯かる無智無謀なる計画に反対するの熱心は、益々高まらざるを得ぬ。何んすれど拱手無為にして暮す者あらん。是れ唯物史観が社会主義運動に熱を加うる所以なのである。」

ここでも、両者の比喩の使い方と、社会主義という必然へ向かう河水の流れを阻害すべきではないとする基本的発想において、類似するものがあると言える。直接的影響関係を言うことはできないが、発想の類似したもう一つの例として挙げておきたい。

- (68) : この小論は、『二十世紀中国文学図誌』＜上＞（楊義、張中良、中井政喜共著、台北業強出版社、1995・1、また増訂版『中国新文学図誌』＜上＞、北京人民文学出版社、1996・8）第34章「《社会組織与社会革命》和郭沫若」で述べた河上博士の本と郭沫若に関する素描を、より詳しく展開したものである。

またこの小論の内容は、1997年1月の中国文芸研究会例会で、「郭沫若と河上肇一文芸理論の基礎として河上肇を受容した可能性のある点について一」という題の下に発表させていただいた。こうした機会を与えて下さり、その場で貴重な御意見をいただきましたことに対して、深く感謝申し上げます。

例会での御意見に関連して、一言補足することにする。私は、郭沫若のその時点その時点での状況に対する生き方の誠実さを信じたいと思う。（逆に言えば、歴史的に見た場合、郭沫若の生き方には見識の欠けるところがあるとする判断は当然可能である。）手近な根拠から言えば、少なくとも、1926年7月からの北伐戦争に直接参加する行動は、そこに郭沫若の真摯な気持ちがなくしては、選択できなかったものである、と私は考える。次のような丸山昇氏の見解に私は賛成したい。

「つねに政治の第一線にあり、振幅も大きいその行動様式には批判も少なくないが、それは私心によるよりも、その時々の思想的課題を彼なりに全力で生きたことによるもので、近代中国知識人の代表の一人であることを失わない。」（「郭沫若」『日本大百科全書』、小学館、1985・8）